

徒然草

目次

序 段 つれづれなるままに……………六

第七 段 あだし野の露……………六

第十 段 家居のつきづきしく……………七

第十一 段 神無月の頃……………八

第十二 段 同じ心ならん人と……………九

第十三 段 ひとり燈火のもとに……………一〇

第十四 段 和歌こそ……………一〇

第十五 段 いづくにもあれ……………一二

第十九 段 折節の移り変るこそ……………一三

第二十 段 なにがしとかやいひし世捨人の……………一六

第二十一 段 よろづのことは月見るにこそ……………一六

第二十六 段 風も吹きあへず……………一七

第二十九 段 静かに思へば……………一八

第三十 段 人の亡きあとばかり……………一八

第三十一 段 雪の面白うふりたりし朝……………二〇

第三十二 段 九月廿日の頃……………二〇

第三十五 段 手のわるき人の……………二二

第三十六 段 久しくおとづれぬ頃……………二二

第三十七 段 朝夕へだてなくなれたる人の……………二三

第三十八 段 名利につかはれて……………二三

第四十一 段 五月五日賀茂の競馬を……………二四

第四十三 段 春の暮つ方……………二六

第四十四 段 あやしの竹の編戸の……………二六

第四十五 段 公世の二位の兄人に……………二八

第四十六 段 柳原の辺に……………二八

第四十七 段 或人清水へ参りけるに……………二八

第五十 段 苅長の頃伊勢の国より……………二九

第五十一 段 亀山殿の御池に……………三〇

第五十二 段 仁和寺にある法師……………三〇

第五十三 段 これも仁和寺の法師……………三一

第五十四 段 御室にいみじき見の……………三一

第五十五 段 家の造りやうは……………三四

第五十六 段 久しく隔たりて……………三五

第五十九 段 大事を思ひ立たん人は……………三五

第六十 段 真栗院に盛親僧都とて……………三六

第六十二 段 延政門院……………三六

第七十一 段 名を聞くより……………三九

第七十三 段 世に語り伝ふる事……………三九

第七十四 段 蟻の如くに集まりて……………四一

第七十八 段 今様の事どもの……………四一

第八十二 段 うすものの表紙は……………四三

第八十七 段 下部に酒飲まする事は……………四三

第八十八 段 ある者小野道風の書ける……………四四

第八十九 段 奥山に猶またといふもの……………四四

第九十二 段 ある人弓射る事を習ふに……………四六

第九十三 段 牛を売る者あり……………四七

第九五 段 高野の証空上人……………四八

第九九 段 高名の木のぼり……………四九

第一百 段 双六の上手といひし人に……………五〇

第一百十七 段 友とするに……………五〇

第一百十九 段 鎌倉の海にかつをといふ魚は……………五一

第一百二十一 段 養ひ飼ふ物には……………五一

第一百二十三 段 無益の事をなして……………五二

第一百三十五 段 資季の大納言入道……………五三

第一百三十七 段 花は盛りに……………五四

第一百四十 段 身死して財残る事は……………五七

第一百四十一 段 悲田院の堯蓮上人は……………五八

第一百五十 段 能をつかんとする人……………五九

第一百七十 段 さしたる事なくて……………六〇

第一百八十四 段 相摸守時頼の母は……………六〇

第一百八十七 段 よろづの道の人……………六二

第一百八十八 段 ある者子を法師になして……………六二

第一百八十九 段 今日はその事を……………六六

第一百九十一 段 夜に入りて……………六六

第一百九十四 段 達人の人を見る眼は……………六八

第一百九十七 段 或大福長者のいはく……………六八

第二百二十六 段 後鳥羽院の御時……………七〇

第二百三十四 段 人の物を問ひたるに……………七一

第二百四十三 段 八つになりし年……………七二

(一) むだなこと。つまらないこと。
(二) 何ということなく。

(三) 京都市の西嵯峨の奥で墓地があった所。
(四) 京都市の東部で火葬場があった所。

(五) 莊子外篇(堯のことば)「富則多(チ)事、壽則多(チ)辱」
秦中吟十首、不致仕「可(レ)憐(ハ)八九十、齒墮(ハ)雙眸昏、朝露食(ニ)名利、夕陽憂(ニ)子孫」

(一) 戸の外側にあるぬれ縁。雨水のたまる間を少しづつすかしてある。
(二) 板・竹などを少しすきまのあるようにならべた垣。
(三) 庭の植込。

○序段 つれづれなるままに、日暮し硯に対ひて、心に映りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。

○第七段 あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住み果るならひならば、いかに物のあはれもなからん。世はさだめなきこそいみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かけろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや。あかず惜しと思はば、千年を過ぐすとも、一夜の夢の心ちこそせめ。住み果てぬ世に、醜き姿を待ちえて何かはせん。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬ程にて死なんこそめやすかるべけれ。

その程過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出で交らはん事を思ひ、夕の陽に子孫を愛してさかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を食る心のみ深く、もののあはれも知らずなりゆくならぬあさましき。

○第十段 家居の、つきづきしく、あらまほしきこそ、飯の宿りとは思へど、興あるものなれ。よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきららかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子、透垣のたよりをかくし、うちある調度も昔覚えて安らかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くの工匠の、心を盡くして磨き立て、唐の大和の、珍しくえならぬ調度も並べ置き、前栽の草木まで、心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは長らへ住むべき。又時の間の煙ともなりなんとぞ、うち見るより思はるる。大方は、家居にこそ事ざまは推し測らるれ。